

2.2 カーマストラの暗号

Kahn は、古典インドにおける暗号の実践的な利用の例としてカーマストラ (*Kāmasūtra*, *KS*) を挙げている。そこで、Kahn が *KS* における「暗号」としたものについて再検討を加えてみることにしたい。

KS は、1.3.16 節において女性が学ぶべき 64 の技芸 (yoga) なるものを列挙しているが、その 46 番目に *mlecchita-vikalpā* (「言語読解法」[4] あるいは「秘かに申合せた言葉の種々な使い方」[5]) が挙げられていることは Kahn も指摘しているとおりである¹。Kahn は、これこそが古典インドにおける暗号の実例であると述べている。しかし、果してこの部分は本当に「暗号」のことなのか、またなぜ「女性が学ぶべき 64 の技芸」に入れられているかについてなど、不可解な点が多い。

mlecchita まず、ここで用いられている *mlecchita* という単語について見てみる。この単語は動詞 *mlecch* の派生語であり、*mlecch* を辞書で引くと “*wältschen, eine unverständliche oder fremde Sprache sprachen*” [1], “to speak indistinctly (like a foreigner or barbarian who does not speak Sanskrit)” [2] のような意味で取られている。これらの情報から判断すると、「洗練されていない、とても言語とは呼べない言葉」が、*mlecchita* という単語の意味と考えることができる。それゆえ *mlecchita-vikalpā* という単語を単純に解釈すると「とても言語とは呼べない言葉についての選択的考察」となるのが自然のように思われる。

Yaśodhara 註 *KS* に対する Yaśodhara の註 (A. D. 400 以降と推定される) によると、彼は *mlecchita* について以下のように述べている。

yat-sādhu-śabda-upanibaddham-apy-akṣara-vyatyāsād-aspāṣṭa-artha tan-mlecchitam-gūḍhavastu-mantra-artham / [3, p. 34]

ここで彼は *mlecchita* を「音節の交換 (akṣara-vyatyāsa) によって意味がわからないものにする」と「内

¹ Kahn はこれを 45 番目としているが、おそらく Kahn が参照した Burton による翻訳の番号をここで用いたからだと思われる。あるいは、*KS* の校訂本 [3] の註部分のナンバリングの間違いを引き継いでしまった可能性も考えられる。この註部分では、*KS* 本文ではそれぞれ 30 番、31 番に割り当てられている *durvācakayoga*, *pustakavācana* の両方に 30 番という番号を割り振っており [3, pp. 32–33]、それ以後は番号がずれている。

	Hard asp.	Soft asp.	na-sal	sv.	Hsp.
Gutturals	k kh	g gh	ñ	h	ḥ
Palatals	c ch	j jh	ñ	y	ś
Cerebrals	ṭ ṭh	ḍ ḍh	ṇ	r	ṣ
Dentals	t th	d dh	n	l	s
Labials	p ph	b bh	m	v	ḷ

note. asp. means aspirate, sp. is spirant, sv. is semi-vowel, and Hsp. is Hard-spirants.

表 1: Consonants in Sanskrit

容を隠した (gūḍhavastu) 言葉」と解釈していることがわかる。そしてその実例として、Kahn も紹介しているように *kautiliya*² からの引用という形で、暗号化の手法を示している。暗号化の実際の手順について述べているのは以下である。

a-kau kha-gau gha-ñau ca-eva ca-
ṭau ña-ṇau na-mau / ya-śau ra-ṣau
la-sau ca-iti mūladevīyam-ucyate [3, p. 35]

ここでは a と ka, kha と ga, gha と ña ... といった文字組を用意しておき、それらを単純に入れ換える手法が例示されている。このような文字組と、表 1 に示したサンスクリット語における子音の一覧とを対照してみると、a と ka の組が母音と子音の交換である以外は、いずれも表 1 において上下左右に隣接した文字間の交換になっていることがわかる。無論、上に示されているのは文字入れ換えに関する読者の理解を深めるために入れられた簡単な実例にすぎないと考えられるので、これだけの記述から、この *KS* の Yaśodhara 註にあげている暗号が現実的にどの程度の堅牢性を持つものであったか等について判断するのは不可能である。

KS における **mlecchitavikalpā** ここまでの経過をふまえて、*KS* における *mlecchitavikalpā* は Yaśodhara が言うような単文字換字暗号なのかについて考えてみたい。特にここでは「64 の技芸」に含まれる項目のうち、*mlecchita-vikalpā* という単語の意味内容を知る手がかりとなりそうな 2 項目を用いた考察をおこなう。

まず 47 番目の「地方語に関する知識 (*deśa-bhāṣā-vijñāna*)」である。 *mlecchita* とは別にこの項目が立

² この単語は、*KS* と非常に関係が深いとされる *Arthaśāstra* の著者 *Kauṭilya* との関係が予想されるものであるが、詳細についてはまだ調査中である。

てられていることから、ここでの *mlecchita* には「サンスクリット語ではない、(野卑な)方言など」というニュアンスが含まれていない可能性が非常に大きいことがわかる。

そして45番目の「指文字のような話し方 (*akṣaramuṣṭikā-kathana*)」という項目である。これについて *Yaśodhara* は *sābhāsā* および *nirābhāsā* という2種類に分けてそれぞれの内容を紹介しているが、その中に、記述内容を他者に知られないために文中の各単語の最初の一文字のみを並べる手法³ が紹介されている。この *Yaśodhara* の解釈がどこまで妥当かどうかは定かではないが、*KS* にある「指文字のような」という単語からは、合言葉・符丁によって(単語レベルで)通信内容を省略して伝える、という意味内容が予想されることは確かである。それゆえ、*mlecchita* には「あらかじめ決めてある、特殊な合言葉・符丁を用いること」という意味が含まれないことが推測される。

これらの記述から、もともとは「言語とは呼べない」といった曖昧な意味内容をもつ *mlecchita* という単語から、「方言を使うこと」「特殊な合言葉・符丁を用いること」といった性質を除外することができる。その結果、*mlecchita* に残る要素としては、*Yaśodhara* が述べているほど体系的かどうかはわからないが、「文面に細工をした文書」である可能性が高いと考えられる。

暗号利用の目的 *KS* において述べられている *mlecchita-vikalpā* が暗号利用のことで仮定した場合に、*KS* ではどのような状況における暗号の利用を想定しているかについて考えてみることにする。

まず、ここで何度も述べられてきた「64の技芸」であるが、これらの技芸は女性が身につけるべきものと記述されているものの、別の箇所、たとえば *KS* 1.3.24-25 によると、これらの技芸は男にとっても有益と書いてあり、決して女性に限定された美德ではないことがわかる。また「これら(64の技芸)によって価値を上げた遊女は、品性・美貌・美德を備えており、人の集まりにおいてガニカーという称号と地位とを獲得する」(*KS* 1.3.20)とあることから、これら技芸は俗世間における自分の価値を高めるための、男女を問わない、一般的に持っていることが望ましい特技を列挙しただけのものではないかと考え

³ 日本語で譬えるならば、「わたしは、はしを、わたる」を「わはわ」とするような手法。

られる。実際、*KS* と同様に *kāma* を主題としている諸テキスト、たとえば *Ratirahasya*, *Anaṅgarāṅga* 等には「64の技芸」と類似した記述がないことから、これらの技芸がとくに *kāma* と関連を持っているものではないことがわかる⁴。

まとめ ここまで述べてきた情報量が少ないために断定はできないものの、*KS* 中に述べられている *mlecchita-vikalpā* は *Yaśodhara* が述べているように、文面に何らかの細工を施して読めなくした文書を読みとくこと、という意味である可能性が高いのではないと思われる。

また、*KS* における「64の技芸」の位置付けから考えるに、これが軍事的・外交的な目的に完全に包接されてしまうものとは考えられないことから、軍事史・外交史という枠組のみで暗号利用の歴史を語ることは歴史を矮小化してしまう虞があるのではないか。

参考文献

- [1] O. Böhtlingk and R. Roth. *Sanskrit-Wörterbuch*. St. Petersburg, 1855-1875 (Reprint in Tokyo, 1976).
- [2] Sir Monier Monier-Williams. *Sanskrit-English Dictionary*. Oxford, new edition, 1899.
- [3] G. D. Shastri. *Kāmasūtra by ŚrīVātsyāyana Muni, with the commentary Jayamangala of Yaśodhar*. No. 29 in Kāshi Sanskrit Series. Benares, 1929.
- [4] 印度学会 訳編. 印度古典 カーマストラ (性愛の学). 大谷大学内印度学会, 1923.
- [5] 岩本裕 訳著. 完訳 カーマストラ. 杜陵出版, 1949 (東洋文庫 628,1997).

⁴ 一方では *KS* には「カーマはそ(の64の技芸)によって成り立っているから」(*kāmasya tad-ātmakatvāt*) *KS*. 1.3.19) という記述があるが、これは「カーマの道を究めるためには、これら64の技芸くらいマスターしなければ話にならない」という立場を *KS* が取っているという程度の解釈でよいのではないか。